

東北大学工学部だより

あおば vol.15 2011 Autumn

萌ゆ

「あおば萌ゆ」の名は、東北大学学生歌タイトル「青葉もゆる、このみちのく」から。生き生きとみずみずしく萌え出する青葉のように、フレッシュな広報誌でありたいという想いを込めています。

あいさつ

「3・11」と私たちが未来永劫、深く胸に刻むことになるであろう大震災から半年が過ぎました。前号の「あおば萌ゆ2011春号」は、急ぎよ編集内容を変更し、震災報告号として皆様の元へお届けいたしました。その中でお知らせした通り、工学部・工学研究科では震災から間をおかず「キャンパス再生ワーキンググループ」を立ち上げ、建物の被害状況を把握するとともに、各系横断的な協体制を敷き、被害に見舞われた研究室の代替スペースを確保して、学業・研究への影響を最小限にとどめるよう努力いたしました。さらに急ピッチで取り組んだのが授業再開に向けた調整です。震災による混乱のなか、例年の1ヶ月遅れという早期始業に漕ぎ着けた陰には、教育・研究活動を滞らせてはならないと奔走された教職員の奮闘があったことを付言させていただきます。

そしていよいよ「キャンパスデザイン復興推進室」主導の下、新生・青葉

山東キャンパスに向けた全体計画が描かれ始めています。建物被害の大きかった「電子情報システム・応物系」「マテリアル・開発系」「人間・環境系」の3棟が新しく建設されるほか、周辺環境も整えられる予定です。免震構造で地震に強く、安全で安心できる研究棟・講義棟、加えて環境・エネルギー問題にも配慮した、持続可能性のあるキャンパスの構築を目指しています。そして何よりも私たちが目標に置くのは、学問を希求する若者たちの志と情熱に応えるような活気に溢れるキャンパスの創造です。「今日も研究を頑張ろう、誰もやっていないことに挑戦しよう」「さあ、勉学に励もう」そういう人を惹きつけるような環境作りです。竣工は平成26年2月を予定しています。

元々工学は、自然科学と社会を架橋する学問であり、人びとの豊かで安全・快適な暮らしと分かち難く結びついています。私たちは今まで世界に

眼を向けて研究を行ってきました。しかし、この未曾有の震災に正対し、「これまで以上に公共の利益に貢献したい」「地域社会の活力につながる研究を担いたい」と多くの研究者が新しい意識と目標を抱いています。研究者に出来ることは少なくないはずです。東北の豊かな未来へ向けて、勇気と気概をもって取り組み始めた私たちの挑戦にどうぞご注目いただきご支援をお願いしたいと思います。



工学研究科 副研究科長(研究担当)

教授 金井 浩

つレアアース・ジスプロシウム。今回のプロジェクトは、研究各チームの“密な連携と協力”が成功への牽引力となりました。そして開発された技術によるネオジム磁石の量産化が検討段階に入るなど、さらなる大きな成果に近づきつつあることも付け加えておきましょう。

る杉
本教授(材料科学総合
学科 知能デバイス
材料学コース)。



HVのモータに使われるネオジム磁石には、重量で約10%に相当するジスプロシウムが使われていますが、当該研究により同様の保磁力を担保しながら添加量を6%程度に抑えることを実現しました